

(様式3)

No. 2001-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ①)	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。		
【事業名称】	四万十市の文化的景観保全計画策定委託業務（I 4 (1) ①ア）		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 内田和伸
【スタッフ】	恵谷浩子、高瀬要一、平澤毅、粟野隆、宮城俊作（奈良女子大学）		
【年度実績概要】	<p>平成 18 年度からの 5 カ年計画の中で、現地調査などを含め具体的に取り組む文化的景観の調査研究対象を四万十川流域とし、高知県内流域 1 市 4 町の調査をおこなった。1 市 4 町は文化的景観保存活用事業として国の補助事業が開始され、“四万十川流域の文化的景観”として同時に重要文化的景観の選定を受けるべく準備を進めている。そのうち、四万十市・梶原町については平成 18 年度から、四万十町については平成 19 年度から、それぞれ四万十川流域の文化的景観の保存活用事業に関わる受託調査を実施してきた。</p> <p>四万十市における調査において、河川地区では四万十川で行われる伝統漁法の風景、洪水時には水面下に没することがある沈下橋の景観などの現地調査をおこなった。最河口部の下田地区は、陸運が盛んになる前、流域の物資が舟運によって集積した集落である。民家の石垣や土台に亀甲積みの石積みが用いられたり、大阪で焼かれた煉瓦が塀に用いられるなど、栄えた頃の面影をみることができる。かつて河口部で堆積した砂利を用いたバラスブロックが作られ、現在も町中の塀に多く残り、河口部独特の景観を呈しており、保存計画を提案した。</p>		
【実績値】	『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書』四万十市、2008.3 四万十市における四万十川流域の文化的景観 7 地区における景観構成要素各 1 式		
【受託経費】	1,400 千円		

(様式3)

No. 2001-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ①)	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。		
【事業名称】	四万十町の文化的景観の調査 (I 4 (1) ①ア)		
【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 内田和伸
【スタッフ】	恵谷浩子、高瀬要一、平澤毅、粟野隆、宮城俊作（奈良女子大学）		
【年度実績概要】	<p>平成 18 年度からの 5 カ年計画の中で、現地調査などを含め具体的に取り組む文化的景観の調査研究対象を四万十川流域とし、高知県内同流域 1 市 4 町の調査をおこなった。1 市 4 町は文化的景観保存活用事業として国の補助事業が開始され、“四万十川流域の文化的景観”として同時に重要文化的景観の選定を受けるべく準備を進めている。そのうち、四万十市・梶原町については平成 18 年度から、四万十町については平成 19 年度から、それぞれ四万十川流域の文化的景観の保存活用事業に関わる受託調査を実施してきた。</p> <p>四万十町は、四万十川中流部に位置する町である。水量の豊富なことから陸運が発展する近代までは河川交通の中継点として栄えた集落もある。舟運の安全を祈願した四万十川最大の中州・三島の調査、本流に堰を設けて河岸の台地上で灌漑をした水路の調査、国有林の伐採で栄えた集落の調査などをおこなった。</p>		
【実績値】	『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書』四万十町、2008.3 四万十町における四万十川流域の文化的景観 7 地区における景観構成要素各 1 式		
【受託経費】	1,400 千円		

(様式3)

No. 2001-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ①)	文化財保護法の一部改正に伴い新たに保護対象となった文化的景観、民俗技術に関する基礎的・体系的な調査・研究を実施し、今後の指定をはじめとする保護施策に関する資料と指針を提供する。
------------------------	--

【事業名称】	橿原町文化的景観保存調査委託業務 (I 4 (1) ①ア)
--------	-------------------------------

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	景観研究室長 内田和伸
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	恵谷浩子、高瀬要一、平澤毅、栗野隆、清水重敦、宮城俊作（奈良女子大学）
--------	-------------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>平成 18 年度からの 5 カ年計画の中で、現地調査などを含め具体的に取り組む文化的景観の調査研究対象を四万十川流域とし、高知県内流域 1 市 4 町の調査をおこなった。1 市 4 町は文化的景観保存活用事業として国の補助事業が開始され、“四万十川流域の文化的景観”として同時に重要文化的景観の選定を受けるべく準備を進めている。そのうち、四万十市・橿原町については平成 18 年度から、四万十町については平成 19 年度から、それぞれ四万十川流域の文化的景観の保存活用事業に関わる受託調査を実施してきた。</p> <p>橿原町は、四万十川最大の支流、橿原川の中・上流部に位置する山間の町である。河川地区には小規模な沈下橋が多く分布する。沈下橋が架けられる前は一本橋があり、出水で流されるたび橋桁に橋板を戻すことになるが、戻しやすい水量を計る計り石なども多く残されており、川と生活の関わりがわかる。棚田地区では、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居の棚田を中心に調査をおこなった。森林地区では、地域の生業である林業の変遷等をまとめ、国有林を中心に価値付けをおこなった。高原地区では、四国カルストに位置する夏山冬里方式の放牧形態をとる牧場地の成立と現況を明らかにした。</p>
<p>【実績値】</p> <p>『四万十川流域の文化的景観保存活用事業報告書』四万十市、2008.3 橿原町における四万十川流域の文化的景観 5 地区における景観構成要素各 1 式</p>
<p>【受託経費】</p> <p>1,585 千円</p>

(様式3)

No. 2007-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4(1)②v)	歴史的建造物の保存・修復・活用に関し重点物件に係る調査・研究を通じた基礎データの収集整理・公開		
【事業名称】	高知県中芸地区森林鉄道遺産国指定物件調査 (I4(1)②オ)		
【担当部課】	文化遺産研究部	【事業責任者】	建造物研究室長 窪寺茂
【スタッフ】	島田敏男・黒坂貴裕・栗野隆・西田紀子・大林潤		
【年度実績概要】	<p>今年度も昨年度に引き続き、森林鉄道本線部の悉皆調査をおこない、本線部における森林鉄道に関する遺構の位置の特定・規模の測量・写真撮影をおこない、本線部の現況を明らかにした。調査物件は 260 件ののぼり、当森林鉄道については、遺構の残存状況が頗る良いことがあきらかとなった。同時に、重要遺構については、調書作成・実測・大判写真撮影をおこない、その特徴を明らかにした。調査対象物件は、隧道6件、トラス橋4件、石造橋1件、コンクリート橋2件、橋遺構3件である。また、資料調査をおこない、森林鉄道建設の経緯および、森林鉄道建設に関わった技術者の系譜をあきらかにした。</p> <p>さらに、今後の森林鉄道遺産の保存・活用を目指して地元がおこなった、シンポジウム等に参加し、地元の団体とともに、保存・活用の方策を検討した。</p> <p>これら、調査・検討および、保存方策の検討の成果をまとめ、『高知県中芸地区森林鉄道遺産 調査報告書』として刊行した。</p>		
【実績値】	<p>論文掲載数：1件（西田紀子「高知県中芸地区の森林鉄道遺産」『奈良文化財研究所紀要2008』2008.6）</p> <p>刊行物：1冊（中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会『高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書』2008.3）</p> <p>収集資料点数：野帳80枚、写真データ800点</p>		
【受託経費】	2,830千円		

様式3)

No. 2007-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4(1)②v)	歴史的建造物の保存・修復・活用に関し重点物件に係る調査・研究を通じた基礎データの収集整理・公開
----------------------	---

【事業名称】	平成19年度京都府近代和風建築総合調査事業（I4(1)②オ）
--------	--------------------------------

【担当部課】	文化遺産部	【事業責任者】	建造物研究室長 窪寺茂
--------	-------	---------	-------------

【スタッフ】	清水重敦、島田敏男、金井健、大林潤、栗野隆、箱崎和久、黒坂貴裕、番光、西田紀子、チェ・ゴウン（日韓交流基金フェロー）、松本康隆（都城調査部派遣職員）
--------	--

<p>【年度実績概要】</p> <p>本事業は、明治以降、昭和20年代までに建設された和風建築、すなわち近代和風建築につき、文化庁による国庫補助を得て都道府県単位で実施されている総合調査の一環で、京都府教育委員会を事業主体として平成18年度から3年間の計画で実施しているものである。本年度は、2年間にわたり計画されている二次詳細調査の1年目であり、京都府教育委員会より当研究所が受託調査研究として業務委託を受け、調査を実施した。</p> <p>調査対象物件は、学識経験者により組織される京都府近代和風建築総合調査委員会での議論を経て決定された200件余りより、今年度分として153件を選定した。対象となる建造物は、住宅建築、宗教建築、商業建築、公共建築など多岐にわたるもので、当時建設された建造物のほぼすべての建築類型を網羅し、かつ、一部町村を除き、京都府内の市町村全域に分布している。</p> <p>調査内容は、①建築的特徴を記録する調査票の作成、②建物平面図、配置図野帳の作成、③35mmカメラによる写真撮影、④大判及び中判カメラによる写真撮影、⑤関連調査、の5項目である。①の調査票は、主要な建造物1棟につき1枚ずつ作成したため、総数は214枚に及んだ。②の平面図は2階建て以上の建物については各階平面図を作成したため、総数は367枚に及んだ。③の35mmカメラによる撮影枚数は、1棟につき50点程度を撮影している。④のうち、中判カメラ撮影は、1棟につき1ないし2枚を撮影し、大判カメラは代表的な建造物18棟を選定し、カラー及びモノクロの4×5判フィルムで撮影した。⑤の関連調査では、各建造物及び建設関係者の背景につき、文献等で追跡調査を実施した。</p> <p>調査内容の概要につき、平成20年3月24日開催の京都府近代和風建築総合調査委員会において報告をおこなっている。</p> <p>今年度の成果品として、以上の調査成果のうち①調査票及び②建物平面図、配置図等野帳を、委託者である京都府教育委員会に納入した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>調査件数：153件、214棟 収集資料：調査票214枚、平面図野帳367枚、配置図野帳196枚、35mmカメラ写真11,450点、中判カメラ写真200点、大判カメラ写真25点 発表資料：「京都府近代和風建築総合調査中間報告」（平成19年度京都府近代和風建築総合調査委員会報告資料） 発表論文等：清水重敦「京都府近代和風建築総合調査」（『奈文研ニュース』28号、2008.3）</p>
<p>【受託経費】</p> <p>2,605千円</p>

(様式3)

No. 2008-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ③)	我が国の古典芸能及び伝統的工芸技術等の無形文化財の伝承実態を把握するとともに、その伝承・公開の基礎となる技法・技術を明らかにする。
------------------------	---

【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業 無形文化遺産保護パートナーシッププログラム (I 4 (1) ③)
--------	--

【担当部課】	無形文化遺産部	【事業責任者】	部長 宮田繁幸
--------	---------	---------	---------

【スタッフ】	鎌倉恵子、高桑いづみ、飯島満、俵木悟（以上無形文化遺産部）、星野紘、上野智子（以上客員研究員）
--------	---

<p>【年度実績概要】</p> <p>本事業は、アジア地域を中心とする無形文化遺産の保護に関する海外研究機関との研究交流を通じて、既存保護事業の企画・実施・評価等の経験を共有するとともに、その分析を通じてよりよい保護事業のあり方を検討し積極的に提言し、将来的なアジアにおける無形文化遺産の国際的研究交流の基礎を構築する事を目指したものである。</p> <p>今年度は、ユネスコの無形文化遺産保護条約政府間委員会や専門家会合及びアジア地域で行われたワークショップなどに出席して、各国の取り組み及び国際的な枠組み形成についての情報を積極的に収集するとともに、モンゴル、インドネシアについては、その保護の体制や現状について現地調査を実施した。</p> <p>また、中国とベトナムから関係研究機関所属の専門家を招聘し、以下のように研究会を実施した。</p> <p>「アジア無形文化遺産保護研究会」 日 時：平成 20 年 3 月 13 日 会 場：東京文化財研究所会議室 発 表：1 日本の無形文化遺産保護の現状 無形文化遺産部 宮田繁幸 2 中国における無形文化財保護の主なモデル—中国無形文化財保護の体系および現状— 中国芸術研究院 苑利 3 東京文化財研究所の無形文化遺産保護のための取り組み 無形文化遺産部 俵木悟 4 モンゴルの研究交流協議についての報告 無形文化遺産部 飯島満 5 ベトナムにおける無形遺産保護の評価 ベトナム文化情報研究所 Bui Hoai Son</p> <p>なお、この協議の内容は報告書にまとめ、刊行した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>報告書刊行数 1</p>
<p>【受託経費】</p> <p>8,000 千円</p>

(様式3)

No. 2009-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	平城京左京二条三坊（第420次）の発掘調査（I 4 (1) ⑤ア）
--------	-----------------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	副部長 山崎信二
【スタッフ】 森川 実、牛嶋 茂			

<p>【年度実績概要】</p> <p>店舗建て替えに伴う発掘調査。調査地はネットヨタの敷地内で、平城京の左京二条三坊六坪にあたる。調査地のすぐ西側では平城第164次調査が、東側では第215次調査が実施されており、今回はこれら既調査地の間で発掘調査をおこなうかたちとなった。</p> <p>調査地付近では盛土が2.5mと厚く、この下位に耕作土・床土がある。床土の直下には洪水砂が、その下位に灰色粘土、暗褐色土が続く。遺構検出面は暗褐色土の上面（標高約61.9m）である。実質的な調査面積は約90㎡。</p> <p>第420次調査で検出したおもな遺構は下記の通り。</p> <p>SB9170 調査区の東壁に沿って南北に並ぶ3基の柱穴であるが、検出できたのはこの建物の西南隅に限られる。柱穴は3.0m（10尺）間隔で並び、中央の柱穴には柱根が、南端の柱穴には礎板が残っていた。</p> <p>SB9171・9172 調査区の北半部～南半部で検出した4基の柱穴で、南北に並んでいる。一列の柱列を構成するようにもみえるが、真中の柱間隔がやや広く、この部分は5.6mである。一方、これ以外の柱間隔は4.8～5.0m（16尺に近似）で、京内の掘立柱建物の梁行に近い。そこで、今次調査では不明確な部分も多いが、柱穴を北側・南側で2基ずつまとめ、それぞれを掘立柱建物（東西棟）の一部と考えておきたい。</p> <p>SB9173 調査区の南半において南北に並ぶ3基の柱穴で、東西棟建物の妻柱筋にあたりと推定。ただし、建物が西へ延びるか、東へ展開するかは不明。柱穴の一部はSD9176に破壊され、このためSD9176より古い建物であるといえる。</p> <p>SD9176 西排水溝に沿って延びる素掘りの南北溝。調査区の中央から南端にかけて検出。</p> <p>SD9177 東西方向の流路で、調査区南端でその一部を検出。</p> <p>今次調査では、近隣の調査と同様に掘立柱建物の一部を検出し、左京二条三坊六坪の南部の状況について知見をくわえることができた。</p>
<p>【実績値】</p> <p>出土品 土器コンテナ4箱、軒丸瓦1点、丸瓦18点、平瓦113点 記録作成 実測図6枚、写真（4×5）2枚 論文 森川 実「左京二条三坊六坪の調査—第420次」『奈良文化財研究所紀要2008』（予定）</p>
<p>【受託経費】</p> <p>1,964 千円</p>

（様式3）

No. 2009-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 4（1）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
----------------------	---

【事業名称】	旧大乘院庭園（第424次）の発掘調査（I 4（1）⑤ア）
--------	------------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	副部長 山崎信二
--------	--------------	---------	----------

【スタッフ】	城倉正祥、島田敏男、牛島茂、中村一郎
--------	--------------------

【年度実績概要】	<p>本調査は、西小池復原整備工事に伴う補足調査で、調査地は西小池南西の旧建物基礎内部（西調査区）及び、西小池の南池東岸部分（東調査区）の2箇所である。調査期間は2007年9月10日から9月19日まで、調査面積は27.8㎡である。そのうち、西調査区は390次調査で検出した鎌倉～室町時代のS B 8983の西側の続きを確認することを主目的として調査したが、近代に標高89.5mまで大きく削平されている事が判明、顕著な遺構は検出できなかった。</p> <p>東調査区は、310次・352次調査の土層観察用畔部分だが、西小池南側が大池方向と池尻方向の二股に分かれる岬に位置するため、汀線と護岸状況の確認を目的として調査した。基本層序は、上から表土、現代盛土、近代客土、堆積土、護岸時の盛土となっている。堆積土の上面で土坑を検出、土坑からは近世前半の軒平瓦が出土した。</p> <p>堆積土を除去すると、調査区のはほぼ中央で護岸の基底石を確認し、汀線を確定できた。護岸は、径約20～30cm大の礫を積み上げているが、大型礫の下には小礫が大量に確認でき、裏込めをしながら比較的急傾斜で礫を積み上げた事がわかる。一方、池底には、径5～10cmほどの小礫を敷いているが、敷石面は基底石から1.5mほど続いたところで途切れ、そこから急激に池底に向かって深くなっている。</p> <p>今回の調査では、西小池南西の旧建物基礎内が近代に大きく削平されていた状況、及び西小池東岸の汀線と護岸状況を確認した。昨年度までの調査成果と合わせることで、西小池の全体像が明らかになった。</p>
【実績値】	<p>出土品 土器類1箱 軒平瓦2点 丸瓦8点 平瓦121点 鉄板1点 鉄パイプテント支脚1点 竜一銭銅貨1点 貝1点 盖板1点 記録作成 遺構実測図3枚 写真31枚（4×5） 論文 城倉正祥「旧大乘院庭園（424次）の調査」『奈良文化財研究所紀要2008』（予定）</p>
【受託経費】	1,099千円

(様式3)

No. 2009-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4(1)⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	法華寺旧境内（第426次）の発掘調査（I4(1)⑤ア）
--------	-----------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	副部長 山崎信二
--------	--------------	---------	----------

【スタッフ】	西口壽生、和田一之輔、栗野隆、浅野啓介、牛島茂
--------	-------------------------

【年度実績概要】	<p>法華寺旧境内に北接する一条条間路上に新築が計画された共同住宅に伴う事前調査として、一条条間路北側溝想定位置に南北6m、東西2mの調査区を設けて実施した。調査は2007年10月1日に地区設定し、上土除去、遺構検出、写真撮影、実測を経て、10月10日の器材撤収を以て終了した。調査地は2007年12月の第417次調査地の東約10mに位置する。結果、地表下約1mまでが近世の土器を含む包含層で、調査区北端に幅2m以上の近世の溝状土坑、南端には幅広く深い近世の弧状溝を検出した。北側溝については溝状土坑でその大半が壊されているために、溝南岸から約1m分を確認できたにとどまる。側溝南岸の位置が第417次調査よりも約0.5m北寄りになるものの、一連の溝であることに疑いはない。なお、南端の弧状溝には、緩傾斜面の北壁裾に幅狭く浅い溝が伴い腐朽した木製棒状品が遺存しており、近世集落を囲む環濠の西南隅部である可能性がある。</p>
----------	---

【実績値】	<p>出土品 土器類10箱（整理箱）、木製品2点、中近世軒丸瓦11点、軒平瓦2点、丸平瓦160kg、隅木蓋瓦1点 記録作成 実測図1枚、写真（4×5）4点 論文 西口壽生「法華寺旧境内（一条条間路）（第426次）の発掘調査」『奈良文化財研究所紀要2008』（予定）</p>
-------	--

【受託経費】	411千円
--------	-------

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 4（1）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
----------------------	---

【事業名称】	法華寺旧境内（第430次）の発掘調査（I 4（1）⑤ア）
--------	------------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	副部長 山崎信二
【スタッフ】	渡邊晃宏、今井晃樹、大林潤、加藤雅土、城倉正祥、石村智		

【年度実績概要】	<p>調査地は、法華寺境内の北隣で、現在は畑として利用している。調査は、集合住宅建設に伴う事前調査としておこなった。南北6m、東西11mのL字型の調査区を設定し、調査開始後、奈良時代後半の遺物を多量に含む土坑を検出し、遺構の範囲の確認と遺物の取り上げを目的として調査区を南北に拡張した。</p> <p>基本層序は、上から耕作土、暗褐色土（床土）、暗茶褐色（近代包含層）、黄褐色（遺構検出面・地山）となる。地表面から地山直上まで深さは約35cm。</p> <p>主な検出遺構は以下のとおりである。</p> <p>SB01 調査区東半で検出した掘立柱建物。建物の北西隅部分で、桁行2間以上、梁行2間以上。柱間は約3m（10尺）等間。柱穴掘形の平面は隅丸方形で、一辺1.0～1.3m。北東の1基は直径約30cmの柱痕が残存する。</p> <p>SK02 調査区の西寄り検出した土坑。東西約4.2m、南北4.3mを検出。南は近代の落込みで破壊されており当初の平面形状は不明。深さ約30cm。土坑は2段掘りで、上段は北にいくほど浅くなり、調査区の北端ではほとんど削平されている。下段は南北に細長い楕円形で、底は凹凸があり平坦ではない。埋土は暗茶褐色粘質土で、土器・瓦などの遺物と炭片を多量に含む。特に土器は状態の良いものが多く含まれている。</p> <p>SB03 SK02を取り除いた下で検出した掘立柱建物。柱穴2基を検出した。柱間は約3m（10尺）。西側の柱穴は長辺0.75mの楕円形で、人頭大の礎盤石2石を残す。東側の柱穴は一辺1.0mの隅丸方形で、柱や礎盤石は抜き取られていた。</p> <p>SX04・05・06・07 SX04はSB01の西で検出した掘立柱の柱穴。掘形は隅丸方形で一辺1.0m。SX05は、SK02の下で検出した柱穴。掘形は隅丸方形で一辺0.85m。SX06・07は、調査区西辺で検出した柱穴。いずれも隅丸方形で、一辺はSX06が1.1m、SX07が1.4m。</p>
【実績値】	<p>出土品 土器・保管用コンテナ80箱、瓦類・軒丸8点、軒平3点、施釉瓦3点、丸瓦・平瓦コンテナ46箱。金属器等・佐波理椀1点、沙波理金具1点、銅滓、鉄滓、鏝</p> <p>記録作成 実測図面5枚、4×5写真10カット、35mm写真約230カット</p> <p>論文 奈良文化財研究所「小規模調査等の概要」『奈良文化財研究所紀要2008』（予定） 2009年発行の『奈良文化財研究所紀要』でより詳しい報告を行う予定である</p>
【受託経費】	966千円

（様式3）

No. 2009-5

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I4（1）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び関連する中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建造物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
---------------------	---

【事業名称】	喜光寺旧境内（第433次）の発掘調査（I4（1）⑤ア）
--------	-----------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 平城地区	【事業責任者】	副部長 山崎信二
--------	--------------	---------	----------

【スタッフ】	加藤雅土、城倉正祥、大林 潤
--------	----------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>喜光寺南門復元工事に先立つ調査である。調査地は喜光寺の現境内の南辺、および喜光寺が奈良県から払い下げを受けた旧公園地上に位置する。調査区は南北13.65m、東西14.95mで、面積は204.07㎡である。調査は平成20年2月18日に開始し、3月12日に埋め戻しを完了した。</p> <p>調査区内は現境内と旧公園地で様相が異なり、旧公園地に対応する部分では、耕作溝等を検出したものの、水田による削堀を受けており明瞭な遺構を確認することはできなかった。これに対し、現境内地ではおもに近世とみられる遺構をいくつか検出することができた。</p> <p>主な遺構として、地表下の最も浅いところ45cmで瓦窯を1基検出した。全長が復元4.4m(検出は3.8m)、峠の高さ45cmの達磨窯で、床、ロストル、焚口などのほか、上部構造物の堆積を確認した。達磨窯の西では長さ3.35m、幅1.4m、深さ0.5mの土坑も検出している。土坑の底面には2枚の炭層があり、その上層には瓦と達磨窯の上部構造物が堆積している。灰原として数回利用された後、窯の上部構造物が廃棄されたものと考えられる。これらは出土した瓦から、近世前半のものともみられる。この他に、廃棄土坑や達磨窯構築以前のものとみられる土坑を数基検出している。</p> <p>中・近世では、寺院の部分的な瓦の需要に対し瓦屋が現地に赴き瓦を制作されていたと考えられており、境内で達磨窯が発掘される類例がいくつかある。今回検出した達磨窯や廃棄土坑も、そうした一例と考えられる。喜光寺は奈良時代に創建された歴史ある寺であるが、今回の調査は、その歴史のなかでも、比較的新しい一部分を明らかにすることができた。</p>
<p>【実績値】</p> <p>出土品 窯壁・焼土プラスチックコンテナ45箱、瓦プラスチックコンテナ31箱、土器プラスチックコンテナ2箱 記録作成 遺構実測図11枚、写真（4×5）43枚 論文 奈良文化財研究所「小規模調査等の概要」『奈良文化財研究所紀要2008』（予定） 2009年発行の『奈良文化財研究所紀要』でより詳しい報告を行う予定である</p>
<p>【受託経費】</p> <p>2,659千円</p>

(様式3)

No. 2013-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	甘樫丘平吉遺跡北方の発掘調査 (I 4 (1) ⑤ア)
--------	-----------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	玉田芳英、番 光、高田貫太、竹本 晃、青木 敬、井上直夫、岡田 愛
--------	-----------------------------------

【年度実績概要】	過去の調査において建物群や炉を検出した甘樫丘平吉遺跡の北方地域において、国営公園整備にともない実施した事前調査。飛鳥川の氾濫原を確認し、古代の遺構は既に削平されている可能性が高いことが判明した。調査面積は202 m ² 、調査期間は2007年9月3日～9月21日。
【実績値】	論文等数 1件（都城発掘調査部「飛鳥・藤原宮跡等の調査概要」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6） 出土品調査数 土器コンテナ 1箱、垂木先瓦 1点、軒丸瓦 1点、丸・平瓦コンテナ 1箱 記録作成数 実測図 12枚、写真（4×5） 4枚
【受託経費】	2,826 千円（受託研究分）

（様式3）

No. 2013—2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 4（1）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
----------------------	---

【事業名称】	藤原京横大路の発掘調査（I 4（1）⑤ア）
--------	-----------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	番 光、玉田芳英、高田貫太、竹本 晃、青木 敬、井上直夫、岡田 愛
--------	-----------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>大和信用金庫八木支店建設に伴う事前調査。2007年7月に橿原市教育委員会が行った試掘調査の結果を受け、遺構の詳細を解明するために実施した。調査地は、藤原京右京一条五坊北西坪にあたり、約75m西において、1992年に橿原考古学研究所が、奈良地方法務局の建設に伴う新益京横大路関連条坊右京一条六坊の調査を行い、横大路南側溝を確認していることから、今回の調査地においても横大路南側溝の検出が期待された。調査面積は260.7㎡、調査期間は2007年9月11日～10月30日。</p> <p>調査の結果、横大路南側溝を1992年の橿考研の調査から想定した位置で確認した。横大路南側溝は、新旧の2条が存在し、南側が古く藤原宮期であり、北側が新しく藤原宮期末～奈良時代であることを遺構の重複関係と出土土器から確認した。これは初めての検出例であり、この地では横大路南側溝が奈良時代に付け替えられ、道路の幅員を狭めた可能性が高いことを示している。藤原京期から奈良時代にかけての横大路のあり方とその性格に重要な知見を加えたと言える。また、横大路南側溝の南側においても東西溝2条とそれらにはさまれた整地層を検出した。これらは何らかの閉塞施設である可能性がある。さらに、右京一条五坊北西坪内でも藤原宮期の建物等を検出し、坪内の状況についても手がかりが得ることができた。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等数2件（番 光 「右京一条五坊の調査—第149・5次」『奈良文化財研究所紀要2008』2008.6、番 光 「横大路南側溝の調査（飛鳥藤原第149・5次）」『奈文研ニュースNo27』2007.12）</p> <p>出土品調査数 瓦14点、土器コンテナ12箱、金属製品2点、石包丁1点、加工木小型コンテナ5箱、動物骨9袋</p> <p>記録作成数 遺構実測図14枚、遺構写真（4×5）10点</p>
<p>【受託経費】</p> <p>5,390千円（受託研究分）</p>

(様式3)

No. 2013-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	藤原京本薬師寺跡の発掘調査 (I 4 (1) ⑤ア)
--------	----------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	丹羽崇史、次山 淳、黒坂貴裕、小田裕樹、関広尚世、井上直夫、岡田 愛
--------	------------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>本調査は、近畿農政局による埋設管付替工事に伴う事前調査である。調査地は、橿原市城殿町のポリテクセンター北側の南北道路上で、本薬師寺金堂跡より西二坊大路をはさんで南東約180mの地点に位置する。調査対象域は、新規埋設管の掘形に合せた東西幅1.7m・南北長約60mにわたる範囲である。そのなかで調査不可能な場所が2ヶ所あるため、調査区を3区に分けて発掘を行い、北から順に北区、中区、南区とした。調査面積は計80.75㎡である。調査期間は平成19年11月20日～12月6日。</p> <p>北区は耕作溝のほか、柱穴の可能性のある土坑を3基検出した。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器などである。中区は石組溝や礫の集積などを検出した。石組溝は中区中央部で検出し、幅約30cmの東西溝で、側石は風化している。礫の集積は中区北側で検出し、軒丸瓦や土器が伴っている。石組溝は中世の遺物が出土した南北方向の溝によって一部壊されている。また、柱痕跡を伴う柱穴も1基確認している。出土遺物には、土師器、須恵器、瓦（軒瓦2点含む）のほか、銅銭（北宋1056年初鑄の嘉祐元寶）、羽釜、播鉢、瓦器、青磁、弥生土器などがある。</p> <p>南区では、弥生時代後期～終末期と思われる流路を検出した。昭和51年の本薬師寺1次調査および平成8年の1996-1次調査で検出した流路の上流部分かと思われる。流路北側が南区から外れるため、幅は確認できなかった。なお、南区は八条大路の北端部と重なっているため北側溝の検出が期待されたが、確認できなかった。後世に削平されたものと考えられる。流路より弥生土器片（後期から終末期ごろ）が出土している。</p> <p>以上のように、本調査では石組溝や礫集積、柱穴のほか、弥生時代の流路を確認することができ、弥生時代、古代、中世を通じての当地の土地利用状況の変遷の一端を明らかにすることができた。また、古代の土器のほか軒瓦片2点が出土し、古代における本薬師寺の周辺部の状況を考えるうえでも重要な資料を得た。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等数1件（丹羽崇史「右京八条二坊の調査-第149-7次」『奈良文化財研究所紀要2008』2008.6） 出土品調査数 土器コンテナ2箱、瓦（軒丸瓦1点、軒平瓦1点、平瓦54点、丸瓦12点）、銅銭1点、石製品1点 記録作成数 実測図14枚、写真(4×5)22枚</p>
<p>【受託経費】</p> <p>3,000千円（受託研究分）</p>

（様式3）

No. 2013-4

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 4（1）⑤）	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
----------------------	---

【事業名称】	藤原京山田道の発掘調査（I 4（1）⑤ア）
--------	-----------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	青木 敬、豊島直博、市 大樹、石田由紀子、番 光、井上直夫、岡田 愛
--------	------------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>過去の調査において、道路遺構等を検出した山田道において、大和平野国営東部幹線水路等改修工事（山田サイホン）にともなう発掘調査を実施した。調査面積は119.35㎡、調査期間は平成20年1月25日から2月6日、および3月3日から11日。</p> <p>調査の結果、戒下川と考えられる旧河道もしくは戒下川につながる水路と推定される近世から近代にかけての流路跡 SD380、ならびに SD380 西側肩部に設けられた木杭と礫を使用する、いわゆる「枠工法」の護岸跡を確認した。さらに、護岸の外側、流路に沿って幅70cmほど榛原石による敷石面を確認した。また、SD380 内に堆積する砂層中から、古代から近代にかけての土器・木製品・瓦をはじめとする遺物が多数出土した。</p> <p>出土遺物では瓦の量が圧倒的に多く、平瓦・丸瓦・垂木先瓦がみとめられるが、このうち垂木先瓦は山田寺のもので、垂木先 E 種と分類されるものである。同じく山田寺に使用された四重弧文軒平瓦片も出土している。丸瓦・平瓦は厚手の古代の個体がまとまって出土しており、形態などの特徴からみると、これらの大半が山田寺で使用された瓦と推定される。今回出土した山田寺の瓦が使用された堂塔まで特定できる資料は少ないが、垂木先瓦 E 種は金堂周辺から集中的に出土していることから、今回出土の垂木先瓦も、金堂に使用された可能性が高い。土器は古代に属するものはごくわずかで、主に中世の瓦器碗片と土師質皿片が多い。これに近世・近代の磁器片が若干混じるため、SD380 の時期推定の根拠とした。木製品は護岸に伴う杭と不明木製品からなる。遺物包含層は相当量の水を含んだ砂層で、遺物量が比較的多く、有機物などが残存することから、流路堆積砂について水洗選別をおこない、微細遺物などの回収作業を実施した。</p> <p>調査成果として、近世から近代にかけての小規模流路における護岸の構造を明らかにしたことがあげられる。確認された護岸の工法は、近世初頭に始まったと考えられる「枠工法」の可能性が高く、出土遺物からみたSD380の時期推定とも矛盾しない。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等数1件（青木 敬「山田道の調査—第149—9次」『奈良文化財研究所紀要2008』2008.6） 出土品調査数 土器等コンテナ1箱、重弧文軒平瓦1点、垂木先瓦1点、丸瓦151点、平瓦504点、木製品等1箱、榛原石2点 記録作成数 実測図4枚、写真（4×5）1枚</p>
<p>【受託経費】</p> <p>3,000千円（受託研究分）</p>

(様式3)

No. 2013-5

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	藤原宮東方官衙地区の発掘調査 (I 4 (1) ⑤ア)
--------	-----------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	石田由紀子、豊島直博、市 大樹、青木 敬、番 光、井上直夫、岡田 愛
--------	------------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>本調査は、農業用水路の改修工事に伴うものであり、橿原市教育委員会の委託を受けて実施した。調査地は高殿集落の西約 60mを北流する水路と重複し、約 60m西に所在する朝集殿北半分から朝堂院東面回廊をはさんで朝堂院第四堂南半分と平行する位置にある。調査区は事前の協議に基づいて、長さ約 114m、幅約 1.5～2m で設定した。調査面積は、約 240 m²。調査期間は、2008 年 1 月 30 日から 2 月 21 日。</p> <p>調査区は、農業用水路と重複するために流水による浸食およびしがらみや木杭による攪乱が著しいが、調査区北半部で藤原宮期の整地層を確認するとともに、掘立柱建物 3 棟、古墳周濠 1 条を検出した。このうち 1 辺 1.2m 以上の大型の柱穴をもつ掘立柱建物 2 棟は藤原宮期のものである。特に、調査区北端から約 15m 南に位置する SB10750 は東西棟、南北棟いずれの可能性もあるが仮に東西棟とすれば妻部分となり、両面底もしくは四面底の建物に復元できる。また、藤原宮期の整地層の下層から古墳の周濠を確認した。周濠は緩やかな円弧を描いており、幅は不明、深さは 30～50 cm。埋土に円筒埴輪片、須恵器、土師器を含む。なお、調査区北端部付近は、五条大路南側溝の想定位置にあたるが、水路による攪乱が著しく遺構は確認していない。</p> <p>本調査は、水路による攪乱や狭長な調査区という制約があったものの、藤原宮期の遺構を複数確認し、朝堂院東方官衙地区の新たな知見を得ることができた。特に、当該期の大型掘立柱建物を 2 棟検出したことにより、五条大路以南の土地利用の一端を知り得たのは重要な成果である。また、藤原宮期の整地層の下層から古墳周濠を検出したことから、藤原宮造営にともなって、古墳周濠を埋め立てるなど大規模な土地造成がおこなっていた可能性が高いことも判明した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文等数 1 件（石田由紀子「朝堂院東地区の調査」『奈良文化財研究所紀要 2008』2008.6）</p> <p>出土品調査数 軒丸瓦 3 点、丸・平瓦整理箱 2 箱、土器類（土師器・須恵器・円筒埴輪）整理箱 3 箱、木製品 1 点、寛永通宝 1 点、石器剥片 1 点</p> <p>記録作成数 実測図 13 枚、写真（4×5）12 点</p> <p>本調査の調査成果は、2008 年度の橿原市の概報にも掲載する予定である。</p>
<p>【受託経費】</p> <p>4,826 千円（受託研究分）</p>

様式3)

No. 2013-6

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (1) ⑤)	平城京、藤原京、飛鳥地域を中心とした我が国及び中国・韓国等諸外国の遺跡の発掘調査並びに共同研究を行うとともに、出土品・遺構の調査・研究及び庭園等に関する基礎的な調査・研究を実施し、それにより古代日本の都城の構造及び建築物の様式並びに瓦・陶磁器・金属器等の手工業生産技術の実態やその変遷過程、庭園等の変遷過程、飛鳥地域の歴史等の解明に寄与する。
------------------------	---

【事業名称】	秋田県胡桃館遺跡出土遺材の調査研究(I 4 (1) ⑤ア)
--------	-------------------------------

【担当部課】	都城発掘調査部 飛鳥藤原地区	【事業責任者】	部長 巽淳一郎
--------	----------------	---------	---------

【スタッフ】	島田敏男、窪寺 茂、箱崎和久、黒坂貴裕、大林 潤、山本 崇、大河内隆之、中村一郎、清水重敦、金井 健、栗野 隆、番 光、西田紀子、渡辺晃宏、馬場 基、浅野啓介、市 大樹、光谷拓実、牛島 茂、井上直夫
--------	---

【年度実績概要】	<p>秋田県北秋田市に立地する胡桃館遺跡は、昭和 42～44 年度に発掘調査がおこなわれ、4 棟の建物 (B1～B3 建物、C 建物) と 2 列の柵列 (A2・A3)、3 本柱群 2 組 (A1) が、いずれも地上から 1～2 m ほどが建ったままの状態で見られたことで有名である。それらの出土建築部材は、主として調査後に建設された収蔵庫に保管されてきた。発掘調査の報告書では、発掘成果として建築的特徴や技術的な観点からの言及もあるが、部材自体の実測図や図面が掲載されていないため詳細が不明であった。一方、平成 17 年には建物の扉板から経典読誦に関する墨書が、当研究所の赤外線カメラ撮影で明らかになった。また年輪年代学の観点からは以前にも調査がおこなわれていたが、今回はそれらも再調査し、収蔵されている部材に関する整理作業と基礎データの収集を目的とする調査をおこなった。</p> <p>調査は、建築・史料・年輪年代学・写真のスタッフが共同しておこなった。整理作業の結果、胡桃館遺跡の出土部材は 412 点におよぶことが判明した。これら全点について赤外線カメラによる調査をおこなったが、新たな墨書資料の発見にはいたらなかった。年輪年代学による調査では、全点のなかから 23 点の部材を選別し、分析をおこなった結果、900 年を上限とする伐採年が想定された。これは既研究成果と齟齬がなく、十和田火山の噴火 (915 年) によって埋没したと考えられる遺跡の年代とも合致する。部材の整理の結果、出土した部材の大半は収蔵されているものの、B1 建物と B3 建物の柱や、B2 建物の土居などについては、一部を除いて収蔵されていないことが明らかとなった。部材の実測調査は、建物ごとに対象を選別しておこなった。その数は、A1 柱群が 4 点 (全 6 点)、A2 柵列が 4 点 (全 11 点)、B1 建物が 42 点 (全 147 点)、B2 建物が 40 点 (全 71 点)、B3 建物が 1 点 (全 1 点)、C 建物が 39 点 (全 69 点) である。これらは実測とともに部材ごとの全景および細部の写真を撮影した。長さ 13m におよぶ長大な C 建物の土居の調査に当たっては、北秋田市教育委員会の協力を得て、収蔵庫外に搬出して調査と写真撮影をおこなうことができた。以上の成果を『胡桃館遺跡出土建築部材調査報告書』として刊行した。</p>
【実績値】	論文等数 3 件 (奈良文化財研究所編『胡桃館遺跡出土建築部材調査報告書』北秋田市教育委員会、2008.3、山本 崇「胡桃館遺跡の出土木簡」『鷹巣地方史研究』61 号、2007.10、箱崎和久「胡桃館遺跡埋没建物と部材の意義」『鷹巣地方史研究』62 号、2008.4)
【受託経費】	3,596 千円 (受託研究分)

（様式3）

No. 2031-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 4 (2) ⑤）	遺跡出土の動植物遺体や古土壌の考古科学的分析により、過去の生業活動の解明と環境復元を行う。		
【事業名称】	東名遺跡出土動物遺存体調査（I 4 (2) ⑤）		
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	環境考古学研究室長 松井章
【スタッフ】	丸山真史（京都大学大学院 人間・環境学研究科博士後期課程）、永井理恵（奈良教育大学）		
【年度実績概要】	<p>本年度の動物遺存体調査は、第2次調査において第2貝塚⑨区から出土した資料の一部について行った。対象としたのは破片点数にして1100点で、そのうち種類と部位が同定できたのは、魚類81点、爬虫類31点、鳥類3点、哺乳類370点の計476点である。今回は、水産資源の利用に注目して考察を行った。</p> <p>当時の東名遺跡は河口付近に立地し、周辺は干潟のような環境であったと推定されている。魚類の主体は内湾および河口域に生息するスズキとボラ科であり、沿岸域や河口域を好むクロダイ属、コチ科、ニベ科、河川に生息するコイ科も少数出土している。このことから、主な漁撈活動の場は内湾や河口域であったと考えられる。また、ムツゴロウに近似するハゼ科も出土しており、干潟における活動も推察される。</p> <p>スズキの歯骨12点から体長を復原した結果、平均54.5cmで30cm以下の個体が確認されなかった。また、ボラ科の資料を奈良文化財研究所の標本（体長35.5cm）と比較した結果、標本よりも大きな個体が多数確認された。このように、本資料の魚類は大型の個体が多い傾向にある。</p> <p>有明海沿岸に所在する縄文時代の貝塚から出土する魚類には、一般に縄文時代貝塚から多く出土するマダイが少なく、スズキ、ボラ科、クロダイ属が多いという特徴がある。こうした傾向は本資料とも一致する。また、東名遺跡を含めた有明海沿岸の4遺跡からスッポンが出土しており、利用のあり方が注目される。このように、東名遺跡はその規模や資料の豊富さだけでなく、有明海沿岸における縄文時代の生業を復原するうえでも重要な遺跡であるといえる。</p> <p>陸産動物ではニホンジカとイノシシが多く出土しており、同定できた資料476点の73.1%を占める。また、この両者のほかにもアナグマやノウサギなど10種類が出土しており、縄文時代早期の段階から幅広い動物資源を利用していたことが確認された。今後は水産資源とともに陸産資源の考察をすすめ、より鮮明な生業の復原を試みる。</p>		
【実績値】	同定および計測を行い分析した動物骨：約1,100点		
【受託経費】	650千円		

（様式 3）

No. 2040-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （17（1））	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
--------------------	--

【事業名称】	初代南極観測船“宗谷”の文化財的価値及び保存修復に係わる調査研究（I4（3）⑥）
--------	--

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター 副センター長 川野邊 渉
--------	------------	---------	-------------------------

【スタッフ】	中山 俊介（保存修復科学センター） 飯沼 一雄（財団法人日本海事科学振興財団）
--------	--

<p>【年度実績概要】</p> <p>平成 19 年に南極観測 50 周年を迎えたわが国の南極観測事業の初代南極観測船として、第 1 次観測から第 6 次観測に至るまで、南極まで観測隊員と物資を運んだ“宗谷”の文化財的価値の検証するとともに現在船の科学館に係留展示されている現状を把握し、今後の保存修復に関する方針を探るべく調査研究を実施した。</p> <p>1. 文化財的価値の検証</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時の文化を伝える存在であること。 ・物として稀少であること。 ・文化だけでなく、技術的にも稀少であること。 <p>の 3 つをキーワードに検証を進めた。</p> <p>2. 現状把握</p> <ul style="list-style-type: none"> ・上からの漏水及び下からの浸水を調査すべく通常は実施されない水中の外板板厚計測などを実施した。 ・船内の各所を目視にて観察し、現状を把握した。 <p>3. 保存整備に係る事項の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の保存方針について ・修復場所について ・今後の修復方針について <p>以上を通じて“宗谷”の価値と保存修復に関する方針について報告書を作成した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>受託事業報告書 1 件 本事業は財団法人日本海事科学振興財団から受託した。</p>
<p>【受託経費】</p> <p>4,095 千円</p>

(様式1)

No. 2041-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化保護政策上、重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務・前期 (I 4 (4))
--------	---------------------------------------

【担当部課】	副所長・保存修復科学センター（東文研） 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）、埋蔵文化財センター（奈文研）	【事業責任者】	副所長 三浦定俊（東文研） 副所長 巽淳一郎（奈文研）
--------	--	---------	--------------------------------

【スタッフ】	石崎武志、犬塚将英、木川りか、佐野千絵、吉田直人、間濶創、川野辺渉、森井順之、加藤雅人（以上、東文研） 松村恵司、内田和伸、廣瀬寛、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（以上、奈文研）
--------	---

<p>【年度実績概要】</p> <p>平成19年度は4月初めから石室解体が始まったが、石室が不安定であったために支保工の設置など万全の対策を講じながら、解体作業と並行して石室細部の調査を行った。その結果、石材接合部に厚く塗られた目地漆喰や小口部の合欠、天井石と南北壁石の側面に穿たれた梃子穴、床石面の水平を出すために使用されたと思われる水準杭の痕跡などが見つかった。墳丘部にあった地震による亀裂は石室にまでいたっていて、この亀裂によって植物の根が伸長して石室外面を覆っていた。また多くの虫が石室の外面に生じた版築の亀裂や、石材接合部の隙間から見つかった。</p> <p>石室上部に設置した内部断熱覆屋内の設定温湿度は、10℃、90%に設定していたが、6月26日に西壁石1の取り上げが完了し、床石のみになったので、発掘の作業性を考慮して、同日に15℃、80%に変更し、さらに7月2日に18℃、70%に設定値を変えた。8月21日に床石の取り上げが完了したので、9月7日に内部断熱覆屋内の空調を止めた。</p> <p>石室解体作業に際する壁画の養生作業はまず、複数の石材にまたがって塗られている目地部分の漆喰を取り外し、別置保存を行った。次に隣接する石同士の縁を切る作業を行った。その後、石材の移動の際に漆喰と顔料の剥落を防止するための表打ちを2層行った。表打の行えない天井石と北壁に関してはMC水溶液の噴霧にて漆喰層の強化を行った。仮保存修理施設に搬送されてきた石材を順次、施設の前室にて付着している泥や黴等を可能な限りクリーニングを行い、作業室に搬入した。その後表打ちの除去を行い、漆喰層の状態を継続観察した。</p> <p>微生物による汚染の状態や分布を正確に把握するため、石室解体・搬出作業にあわせて試料採取と、壁画や作業環境のカビ汚染状況の監視、壁画や目地などの目視調査を行った。試料採取後には、カビ等微生物の作業空間への飛散を防ぐため、直ちに汚染面の消毒作業を行った。</p> <p>高松塚古墳石室の解体作業に際して、事前調査、解体準備、解体作業、搬送の各作業段階において、ハイビジョン撮影によるビデオ記録を作成した。また、取上前の事前調査において、各石材の表面含水比、強度、寸法・形状、亀裂状態などの詳細なデータを収集し、記録をおこない、解体作業を安全におこなうための重要な資料とした。</p>
<p>【実績値】</p> <p>論文数4件 高妻洋成、「高松塚古墳石室石材の運搬」、文化庁月報、No.466、pp.12-13、平成19年7月25日 松村恵司「高松塚古墳石室の発掘調査」、文化庁月報、No.466、pp.16-19、平成19年7月25日 肥塚隆保・建石徹、「高松塚古墳の石室解体の実施」、文化庁月報、No.467、pp.12-15、平成19年8月25日 石崎武志・木川りか「内部断熱覆屋と生物」、文化庁月報、No.467、pp.20-21、平成19年8月25日</p>
<p>【受託経費】</p> <p>111,941千円</p>

(様式1)

No. 2041-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化保護政策上、重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
---------------------	--

【事業名称】	特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務（I4 (4)）
--------	----------------------------

【担当部課】	副所長・保存修復科学センター（東文研） 都城発掘調査部（飛鳥藤原地区）、埋蔵文化財センター（奈文研）	【事業責任者】	副所長 三浦定俊（東文研） 副所長 巽淳一郎（奈文研）
--------	---	---------	--------------------------------

【スタッフ】	佐野千絵、木川りか、吉田直人、犬塚将英、間瀬創、石崎武志、川野辺渉、森井順之、加藤雅人、北野信彦（以上、東文研） 玉田芳英、村上隆、豊島直博、内田和伸、井上直夫、石田由紀子、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、関広尚世（以上、奈文研） 宮原晋一（奈良県教育委員会）、相原嘉之、長谷川透（明日香村教育委員会）、花谷浩（出雲市教育委員会）高橋克壽（花園大学）片山一道（京都大学大学院理学研究科）
--------	--

【年度実績概要】	<p>平成19年度は東西壁の無地部分の剥ぎ取りをワイヤソー、バンドソーにて行った。天井は無地部分、朱線部分、星宿部分の劣化が著しい箇所を優先的にヘラによる剥ぎ取りを行った。平成20年1月には日像の剥ぎ取りを行った。天井剥ぎ取りの準備として、表打ちの実験、使用材料の選定、剥ぎ取り後の天井漆喰の処置方法の検討を行った。また、天井作業用にワイヤソー、バンドソーの改良を行い、天井模型を使用した剥ぎ取り実験を行った。展示のために「玄武」の修復を行い、平成20年度用に、子・丑・寅の修復を行っている。その他の漆喰片についても経過観察及び保存処置を継続中である。</p> <p>環境ステーションによる保存施設内外の環境データ計測を継続して行った。平成18年度の暖冬の影響を受けて、平成19年度、石室内温度は高めとなる時期が長く、一時的に微生物活動に有利な条件となった。相対湿度については、石室内95%以上、小前室90%以上の剥落しにくい湿度で安定していた。相対湿度センサーの種類を変えた後、計測不良などの不具合は生じていない。土壌水分については、墳丘裾0.5m下に設置されているセンサー以外の指示値は安定した状態にある。また保存施設内では浮遊菌調査を約2回/月で実施し菌種と汚染状況を把握し、施設の清浄化を監視した。</p> <p>この他、発掘調査報告書の編集、刊行を行った。これは平成14年度から16年度の3ヶ年に渡る調査の正式報告書であり、遺構、遺物の記載をはじめ、関連調査として金属製品や人骨、漆喰、石材等の分析を行い、キトラ古墳について総合的な考察を加えたものである。また、壁画についてはフォトマップを提示した。今後刊行を予定されている高松塚古墳の報告書とともに、日本における大陸的な壁画古墳の報告書として重要なものとなるであろう。</p>
【実績値】	報告書1件 『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告』2008
【受託経費】	99,930 千円

(様式1)

No. 2041-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化保護政策上、重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
---------------------	--

【事業名称】	国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務・後期 (I4 (4))
--------	--------------------------------------

【担当部課】	副所長・保存修復科学センター（東文研） 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）、埋蔵文化財センター（奈文研）	【事業責任者】	副所長 三浦定俊（東文研） 副所長 巽淳一郎（奈文研）
--------	--	---------	--------------------------------

【スタッフ】	石崎武志、犬塚将英、木川りか、佐野千絵、吉田直人、間瀬創、川野辺渉、森井順之、加藤雅人、北野信彦（以上、東文研） 松村恵司、内田和伸、廣瀬寛、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（以上、奈文研）
--------	--

【年度実績概要】

石室の解体が終了したので空調施設を10月1日に撤去し、11月に冷却管の撤去を行った。

仮設修理施設に搬送した壁画について経過観察を行い、生物被害の進行が沈静化するのを確認すると共に修理に必要な損傷図面の作成を順次始めた。11面それぞれに7種類（漆喰層の欠失・漆喰層表面面の損傷・亀甲状の欠失・漆喰層の陥没・黒かびによる汚染・バイオフィームによる汚染・流入土痕）の損傷を実物大のフォトマップの上に書き込み、データ化を行い、現在までに天3と東女子の損傷図面のデータ化が終了した。同時に漆喰面を広く覆っている黒いかびとバイオフィームによる汚れの除去方法の開発評価を行った。

解体に際して予め取り外した遊離石材を含浸強化し、破片同士の接合および整形処置を行なった。また、いくつかの石材には石材を破断する大きな亀裂を有するものもあり、修理作業および保管において安定化させる必要があるため、保護拘束具の実験を行い試作した。また、高松塚古墳保存修理施設の床下に安置してあった凝灰岩切石の取り上げ作業において、ポリライトによる観察、表面含水比測定、針貫入試験、ハイビジョン撮影によるビデオ記録の作成を行った。

石室解体・搬出作業開始に伴い採取した試料に対して、重要度の高い試料から順次直接顕微鏡観察、微生物分離・同定作業などを進めた。肉眼ならびに実体顕微鏡による観察を行った結果、大多数の試料中には暗色系不完全菌類を中心とするカビや細菌（バクテリア）が含まれており、その細胞形態等から複数の微生物が混生している状態が観察された。また壁石間の小口面から採取した、黒褐色に着色した漆喰片土壌混合物や漆喰片にダニ等の微小動物が比較的多い傾向が認められ、壁石間の小口面、目地漆喰等の黒色部などは、微生物やダニ等のいわゆる“巣”となっていたと考えられた。微生物分離・同定作業は現在まだ進行中であるが、菌類の詳細な同定結果より、その由来や生理的性状などについて推定する際に有効な情報が得られつつある。

発掘成果については、図面・写真類の整理作業を進めたほか、拓本については裏打ち加工し、スキャナーによる取り込み、合成作業を行った。また取り上げた版築土に対しては、搗棒痕跡やムシロ目が明瞭に残るものなど優先順位の高いものから樹脂を含浸させ保存強化を行い、剥ぎ取り転写した版築層については木製板に貼り付け、展示・公開用のパネルとして仕上げた。

【実績値】

論文数4件

肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子、「石室解体と輸送」、月刊文化財、No. 532、pp. 22-37、平成20年1月1日

肥塚隆保・高妻洋成・降幡順子・建石徹・田辺征夫、「国宝高松塚古墳壁画保存修理のための石室解体」、2007 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム発表要旨輯、pp. 153-158、2007年11月1日

木川りか、杉山純多、高鳥浩介、間瀬創、佐野千絵、三浦定俊：高松塚古墳発掘・解体作業に伴う生物調査の概要について、保存科学、47号、121-128（2008）

松村恵司、「高松塚古墳の発掘調査」、保存科学研究集会2007 壁画古墳の保存に関わる諸問題 要旨集、pp. 8-16、平成20年2月27・28日

【受託経費】

78,543千円

(様式3)

No. 2042-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託業務 (I 4 (4))
--------	--------------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（企画調整部）
--------	------------------------

【年度実績概要】	長野県社宮司遺跡より出土した六角木幢の5ヵ年にわたる保存処理研究受託事業の4年度めである。本年度は、長野県社宮司遺跡より出土した六角木幢の真空凍結乾燥処理を継続し、年次報告書を作成した。
【実績値】	長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託事業年次報告書
【受託経費】	1,512 千円

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	秋田県漆下遺跡出土漆関連遺物分析調査 (I 4 (4))
--------	------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（企画情報部）、岡村道雄（企画調整部）
--------	------------------------------------

【年度実績概要】	秋田県漆下遺跡より出土した漆関連遺物について、X線 CT による撮影、FT-IR 分析、X線透過撮影をおこない、縄文時代の漆工芸技術に関する情報を収集し、年次報告書を作成した。
【実績値】	秋田県漆下遺跡出土漆関連遺物分析調査年次報告書
【受託経費】	530 千円

(様式3)

No. 2042-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査ならびに保存修理 (I 4 (4))
--------	---------------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎 (企画調整部)
--------	-------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>奈良県黒塚古墳より出土した鉄製品（東棺外鉄製品一括）は錆着が激しく、出土時のままで保管されてきた。しかしながら、出土後、長期間を経過しているため、さらなる錆化とそれともなう破損が進行しており、一刻も早い保存修理が必要である。同遺物の保存修理にともなう事前調査ならびに保存修理を実施し、報告書を作成した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>重要文化財奈良県黒塚古墳出土品事前調査ならびに保存修理報告書</p>
<p>【受託経費】</p> <p>12,000 千円</p>

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う環境調査 (I 4 (4))
--------	---------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎 (企画調整部)
--------	-------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>大分県日田市のガランドヤ古墳の保存整備事業にともない、古墳周囲の環境および石室内の環境を調査するために、気象観測ステーションを設置し、気象観測を開始した。また、石室周囲の土中の水分状態等を調査するため、比抵抗映像法による測定をおこない、保存処置に関する重要な情報を提示した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う環境調査報告書</p>
<p>【受託経費】</p> <p>1,964 千円</p>

(様式3)

No. 2042—5

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 4 (4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
----------------------	--

【事業名称】	群馬県万蔵寺廻り遺跡出土炭化繊維遺物の分析調査 (I 4 (4))
--------	-----------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	保存修復科学研究室長 肥塚隆保
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎 (企画調整部)
--------	-------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>群馬県万蔵寺廻り遺跡より出土した炭化糸に対して、X線CTによる撮影、FTIR分析、X線透過撮影、顕微鏡観察をおこない、糸巻きの構造および糸に関する考古学的な情報を収集し、報告書を作成した。</p>
<p>【実績値】</p> <p>群馬県万蔵寺廻り遺跡出土炭化繊維遺物の分析調査年次報告書</p>
<p>【受託経費】</p> <p>350 千円</p>

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I4（4））	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
--------------------	--

【事業名称】	徳島城本丸跡の石垣遺構等の科学的探査（I4（4））
--------	---------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	金田明大、西村康（客員研究員）、西口和彦（兵庫県立考古博物館）
--------	---------------------------------

【年度実績概要】	<p>徳島城本丸地区の埋没石垣の状況の把握を目的として、物理探査手法による探査をおこなった。</p> <p>当地区の石垣は、詳細な表面観察によって、構築に時間差がある可能性が指摘されている。昨年度は、部分的にその検討をおこなうべく探査を実行し、蜂須賀氏入府以前の本丸が複数の区画に分割されていた可能性を示すことができた。</p> <p>本年度の調査では、本丸地区全域を対象として電気・地中レーダの二つの手法をおこない、成果を統合した。</p> <p>この結果、本丸西側においても、現在表面に存在する近世の石垣の裏に、古い段階の石垣が残存する可能性が高い部分が2箇所確認できた。</p> <p>これにより、近世以前の徳島城は、本丸地区を中心としてより小区画の郭により構成され、蜂須賀氏入府後、新たな石垣の造成により、本丸地区が一つの広い区画に再整備された可能性が高まった。</p> <p>石垣が現存するために、発掘調査などの手段で内部の構造を直接的に把握するのが難しい城跡において、物理探査の手法が効果を発揮することを示せた点で重要な成果と考える。</p>
----------	---

【実績値】	<p>発表件数： 1件</p> <p>取得データ： 2種（地中レーダ、電気）</p> <p>対象面積： 約3,500㎡</p>
-------	---

【受託経費】	600千円
--------	-------

(様式3)

No. 2042-7

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I4(4))	高松塚古墳、キトラ古墳の保存対策事業など、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施する。
--------------------	--

【事業名称】	石岡市瓦塚瓦窯の探査 (I4(4))
--------	--------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
--------	-----------	---------	-----------------

【スタッフ】	金田明大、西村康（客員研究員）、西口和彦（兵庫県立考古博物館）
--------	---------------------------------

【年度実績概要】	<p>県史跡瓦塚瓦窯の範囲確認と詳細分布調査を目的として、物理探査手法による窯跡および周辺施設の探査をおこなった。表面調査および既存の発掘調査における窯跡の遺存状況はきわめて良好であり、未知の窯跡の存在が期待された。そこで、今回は、埋没・遺存している窯の詳細を検討するために、磁気・電気・地中レーダと複数の探査手法を組み合わせて調査することとした。</p> <p>その結果、既知の窯に加えて、新たに窯の可能性が高いもの4箇所、その可能性が指摘できるもの8箇所以上を明らかにすることができた。これにより、所期の目的は達成できたと考える。</p> <p>本遺跡は日本でも有数の良好な遺存状態を残す遺跡であり、あわせておこなわれた地形調査の成果などと統合することにより、さらに検討をおこなっていく必要がある。</p> <p>また、周辺には、ほかにも窯跡群や生産にかかわる付属施設が存在する可能性が高く、今後とも詳細な調査が必要である。</p>
----------	--

【実績値】	<p>取得データ： 3種（磁気、電気、地中レーダ）</p> <p>対象面積： 約 11,300 m²</p>
-------	---

【受託経費】	451 千円
--------	--------

(様式1)

No. 2204-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。		
【事業名称】	陝西省唐代陵墓石彫像保護修理事業 (I5 (1) ②イ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
【スタッフ】	杉崎佐保恵 (文化遺産国際協力センター)		
【年度実績概要】	<p>本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団からの受託による。</p> <p>1) 唐陵石彫像保存修復事業指導委員会・専門家委員会の開催 4月23日から26日の日程で、西安市において第3回目の指導委員会・専門家委員会を開催した。日本からは、指導委員として渡邊幸夫 (財団理事)、専門家委員として矢野和之 (文化財保存計画協会)、西浦忠輝 (国士舘大学教授)、根立研介 (京都大学助教授) のほか、本事業への資金提供者である黒田哲也氏が出席した。 会議では、2006年度に実施した乾陵北門、西門及び測閣陵園区の考古調査、乾陵及び測閣陵の環境整備作業、日中研究交流等についての報告が行われ、その成果について日中双方の専門家から高い評価を得た。併せて2007年度の作業計画の報告が行われ、専門家から各種のアドバイスを受けた。</p> <p>2) 中国側の来日研究 11月19日から12月16日の日程で西安文物保護修復センター周偉強研究員、同甄剛研究員を招へいた。本事業が2008年度に最終年度を迎え、3陵石彫像についての各種修復作業が本格的に行われるにあたり、石材の接着材料と技法、接着部位の化粧 (仕上げ) 方法をテーマとして、授業、現場視察、実習によって研修を実施した。</p> <p>3) 作業の進捗状況 2007年度は、橋陵の地下埋蔵石造物に対する考古調査、順陵石彫像に対する三次元モデル作成の試験的研究と力学的分析に関する実験計画案の作成、順陵及び乾陵石彫像の修復作業、橋陵石彫像の劣化状態図作成等を実施した。</p> <p>4) 事業実施のための合意書の期間延長手続き 本事業は2004年から4年間の日程で実施される予定であったが、第1年目に実質2年間で費やしたため、結局期間が5年間になった。このため、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団と陝西省文物局が2004年に調印交換した事業合意書と、西安文物保護修復センターと東京文化財研究所が同時に調印交換した事業推進のための合意書をそれぞれ1年延長する必要が生じ、両方の合意書について西安文物保護修復センターと共同で更新作業を行い、いずれも3月までに手続きを完了した。</p>		
【実績値】			
【受託経費】	1,778千円		

(様式1)

No. 2204-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	龍門石窟保護修復プロジェクト (I5 (1) ②イ)
--------	----------------------------

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
--------	--------------	---------	--------------

【スタッフ】	清水真一（文化遺産国際協力センター）、石崎武志（保存科学修復センター）、津田豊（(株)ジオレスト）、中田英史（(有)ウッドサークル）、西浦忠輝（国士舘大学）
--------	--

【年度実績概要】	<p>ユネスコ/日本信託基金によって2001年11月から開始された中国龍門石窟保護修復プロジェクトに、ユネスコのコンサルタント兼プロジェクト専門家として参加している。</p> <p>1) 第2期の実施と第5年目契約、第6年目契約：2005年2月28日と3月1日に北京で開催された専門家会議及び日本・中国・ユネスコ3者会議で決定承認された第2期計画案と予算案に基づき、開始される予定になっていた第2期作業は、2006年度において何ら進捗を見せなかった。これは、施工設計案の作成の遅れと、第2期工事（潜溪寺洞上部整備工事）の請負業者の入札に関して、総額10万ドルを超える契約に関しては国際入札を原則とするユネスコに対して、文化遺産における施行について外国企業の参入を認めない中国政府の原則が対立し、業者入札を実施できない状態が続いていたためである。この問題については、2007年7月になってユネスコパリ本部が中国国内業者だけによる入札を認めたため、ようやく進展をみた。コンサルタントとしては、2006年8月に結んだ第5年目の契約が2007年3月31日に終了したのち、第6年目の契約を2007年7月から2008年3月31日を期間として結んだので、上記問題の推移に関しては関与する立場になかった。</p> <p>2) 第2期工事（潜溪寺洞上部整備工事）の実施：2007年8月、洛陽市文物局が主催して入札が行われ、工事業者が選定されたが、洛陽市が業者と契約を行ったのは11月下旬になってからで、最終的に業者が潜溪寺洞での作業を開始したのは12月25日となった。工期は120日間を予定している。</p> <p>3) 専門家会議の実施：2007年度は、1月29日、30日の日程で、北京の中国文化遺産研究院において、日中双方の専門家が参加して会議を開催した。この会議において、施工中の潜溪寺洞上部整備工事の技術的問題を討議するとともに、第2期の終了時期を2008年9月とすること。主に時間的理由により、試験洞窟3つのうち、潜溪寺洞について重点的な保護修復作業を行うこと。各窟壁面のクリーニングに関して龍門石窟研究院による計画案を再度検討すること。などが話し合われた。</p>
----------	---

【実績値】	
【受託経費】	2,336千円 (20,000USD)

(様式3)

No. 2206-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存事業 (I5 (1) ②ウ)
--------	-------------------------------

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	稲葉信子、山内和也、朽津信明、岩出まゆ、宇野朋子、谷口陽子、影山悦子、有村誠（以上、文化遺産国際協力センター）、西山伸一、前田耕作、岩井俊平（以上、客員研究員）、岡村道雄、井上和人、窪寺茂、森本晋、石村智、脇谷草一郎（奈良文化財研究所）
--------	--

【年度実績概要】	<p>本事業は、二十余年にわたる内戦時に爆破、盗取によって破壊されたバーミヤーン遺跡の文化遺産の保存・修復に協力することによって、同文化遺産を保護するとともに、アフガニスタンの文化遺産を保護していく現地の人材を育成し、技術を移転することを目的としている。</p> <p>本年度は平成19年6月9日～7月15日に第8次ミッションを派遣し、壁画の保存修復、考古学調査を行なった。また、それぞれの活動を現地の専門家と一緒に作業することによって、人材育成・技術移転を図った。</p> <p>①壁画の保存・修復：I窟、N(a)窟の保存修復 I窟においては、壁画の崩落を予防する目的で、壁画のグラウティング（モルタルによる注入接着）とエッジング（壁画の周縁をモルタルでとめる作業）を実施した。これにより、I窟に残存するすべての壁画の補強作業を終了することができた。 N(a)窟においては、壁画の微細な剥落の一因ともなっている壁画表面に付着するスス状の黒色物質の洗浄作業を実施した。また、壁画の機械的、化学的洗浄を安全に行うために、現在崩落の恐れのある壁画の周辺部について、I窟同様にグラウティングおよびエッジング処理を行った。</p> <p>②考古学調査 考古学調査は、文化的および考古学的地区の範囲を確定すること、保護されるべき遺跡の位置と種類を特定することを目的に、試掘調査と遺跡の踏査を行った。試掘調査では、西大仏の南西にあたる地点で、仏教時代に遡る可能性のある遺構が発見された。同遺構は『大唐西域記』に記された「王城」と関連する可能性がある。また、バーミヤーン谷に隣接するカクラク谷において、遺跡の踏査を行い、石窟や望楼などを新たに確認した。</p>
----------	--

【実績値】	<p>職員派遣数：7名</p> <p>報告書：①概報第2巻『バーミヤーン遺跡保存事業概報－2006年度（第6・7次ミッション）－』及び同英語版 ②『Preliminary Report on the Safeguarding of the Bamiyan Site 2006 –6th and 7th Missions－』 ③概報第3巻『バーミヤーン仏教石窟調査概報－2006年度－』 ④別冊第3巻『バーミヤーン遺跡保存のための環境調査報告－2005～2006年－』</p> <p>発表：⑤山内和也、有村誠「アフガニスタン、バーミヤーン遺跡保存事業－2007年度の成果－」『平成19年度考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 08.3.16</p> <p>報告：⑥山内和也、有村誠「アフガニスタン、バーミヤーン遺跡保存事業－2007年度の成果－」『平成19年度考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 pp.152-157 08.3.15.</p>
-------	--

【受託経費】	10,467千円 (90,000USD)
--------	----------------------

(様式3)

No. 2206-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5(1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
--------------------	---

【事業名称】	タジキスタン共和国アジナ・テパ仏教寺院の保存修復事業（I5(1)②ウ）
--------	-------------------------------------

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
--------	--------------	---------	---------------

【スタッフ】	有村誠（文化遺産国際協力センター）、岩井俊平、西山伸一（以上、客員研究員）
--------	---------------------------------------

【年度実績概要】	<p>ユネスコ文化遺産保存日本信託基金で行われている「タジキスタンの仏教遺跡保護プロジェクト」は、練り土、日干しレンガ、焼成レンガで構築された土構造物であるアジナ・テパ遺跡を保護することを目的としている。そのために、崩壊の危機に晒されている壁体を補強するとともに、ストゥーパの保存方法を検討し、遺跡の保存修復を行うことが計画されている。</p> <p>1960年代から1970年代にかけて行われた発掘調査以後、遺跡はその一部が埋め戻され、加えて大量の土砂が堆積し、さらには植物（雑草）によって遺跡が覆われている状態であった。そのため、発掘当初の壁、床面を明らかにするために、堆積した土砂を除去する清掃作業を行う必要があった。こうして2006年度のミッションでは、清掃作業が実施されたが、その過程において、過去の発掘調査が十分でなかったことが分かり、清掃作業に先立って、新たな考古学的な発掘調査が必要であることが判明した。東京文化財研究所は、寺院本来の姿を明らかにするための考古学的な発掘調査を行うことを目的とし、2007（平成19）年4月に現地にミッションを派遣した。</p> <p>今回のミッションでは、ストゥーパ周辺（塔院区）や寺院の外周において発掘調査を行い、塔院区の壁や床面の検出、および外壁の位置を確認し、寺院本来の姿を明らかにするデータを得ることができた。これらは、遺跡を保存修復する際に必要不可欠なものになると考えられる。今後も遺跡の全貌が明らかになるような限定的な発掘調査と清掃作業を、壁の補強など保存修復班が行う作業と歩調を合わせながら、実施していく必要がある。</p>
【実績値】	<p>職員派遣数：3名</p> <p>学会発表：①山内和也、岩井俊平「タジキスタン、アジナ・テパ仏教寺院の保存事業—2007年度の成果—」平成19年度考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会 日本西アジア考古学会 08.3.16.</p> <p>報 告：②山内和也、岩井俊平「タジキスタン、アジナ・テパ仏教寺院の保存事業—2007年度の成果—」『平成19年度考古学が語る古代オリエント 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会 pp.158-1162 08.3.15.</p>
【受託経費】	2,376千円（24,881USD）

(様式3)

No. 2206-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。		
【事業名称】	中国及び中央アジア各国におけるシルクロード広域の世界遺産登録推進運動の実態調査及び登録文化遺産または登録の可能性のある文化遺産の現状調査 (I5 (1) ②ウ)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	地域環境研究室長 山内和也
【スタッフ】	谷口陽子、高林弘実（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫（客員研究員）、初井基充（実践女子大学）、ウブリ・マイマイティアイリ（新疆ウイグル自治区文物局）、王小偉（敦煌研究院保護研究所）		
【年度実績概要】	<p>本研究は、2006年度に引き続き、現在、ユネスコ世界遺産センターおよび中国、カザフスタン、キルギス、ウズベキスタン、タジキスタンの5カ国を中心に推進されている「シルクロード」のユネスコ世界遺産への登録に関して調査を行うものである。今年度は、「中国新疆ウイグル自治区および中国西域の仏教ロード沿いに分布する仏教壁画を有する石窟の現地調査」として、関連する遺跡を調査し、研究・保存修復の現状を把握する。</p> <p>本年度は、重要な仏教壁画を有する遺跡が分布する新疆ウイグル自治区のトルファンへのベゼクリク千仏洞、クチャのキジル千仏洞、シムシム千仏洞、クムトラ千仏洞、クズルガハ千仏洞の石窟を対象に、新疆ウイグル自治区文物局および敦煌研究院との協力のもと、崖に開鑿されている石窟の状態、壁画の保存状況、彩色の詳細な状態調査を行った。あわせて、文化遺産国際協力センターが既に保存修復調査を実施している、敦煌莫高窟やバーミヤン遺跡、アジャンター石窟など、シルクロードの壁画の比較のための彩色材料や技法の点からの観察、調査研究を行った。</p> <p>キジル千仏洞の方形組上げ天井を持つ石窟の彩色など、膠着材や層構造の詳細な分析によって、技法や材料の広がりや明らかになりうる可能性も高いものもみられた。また、なかには、透明性の高い有機物からなる鮮やかな赤色など、比較的保存状態の良い色材が観察される場合もあり、今後、科学的な研究を行うことによって、シルクロードの壁画の技術を明らかにする鍵となるような、重要な成果が得られるのではないかと期待された。</p>		
【実績値】	<p>職員派遣数：4名</p> <p>報告書：①『シルクロード沿いの世界遺産登録に関する現地調査－中国新疆ウイグル自治区および中国西域の仏教ロード沿いに分布する仏教壁画を有する石窟の現地調査－』報告書およびDVD版</p>		
【受託経費】	2,088 千円		

(様式3)

No. 2206-4

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (1))	文化財の保護制度や施策の国際動向及び国際協力等の情報を収集、分析して活用するとともに、国際共同研究を通じて保存修復事業を実施するために必要な情報収集を行う。また、国内の研究機関間の連携強化や共同研究、研究者間の情報交換の活発化、継続的な国際協力のネットワークを構築し、その成果をもとにアジア諸国に於いて文化財の保存修復事業を推進する。
---------------------	---

【事業名称】	ユネスコ／バーミヤーン遺跡保存に関する第6回専門家作業グループ国際会議の開催 (I5 (1) ②ウ)
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	稲葉信子、山内和也、谷口陽子、岩出まゆ、宇野朋子、有村誠、影山悦子（以上、文化遺産国際協力センター）、前田耕作、岩井俊平（以上、客員研究員）
--------	--

【年度実績概要】	<p>東京文化財研究所・文化遺産国際協力センターは、「西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業」の一環として、また「ユネスコ文化遺産保存日本信託基金」による受託研究として「バーミヤーン遺跡保存事業」を実施している。2007（平成19）年は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金によるバーミヤーン遺跡保存事業の第Ⅱ期の最終年にあたることから、これまでの活動の成果を検討・評価するとともに、つづく第Ⅲ期の具体的な活動計画を立案・作成することが必要となった。そこで、東京文化財研究所とユネスコが共催して、バーミヤーン遺跡保存事業に携わる国際専門家が集まり、上述の案件について話し合う会議を開催した。</p> <p>平成19年1月20日から22日にわたり、バーミヤーン遺跡保存事業に携わる国際専門家を招へいし、東京文化財研究所にて国際会議を開催した。会議は5つのセッションからなり、壁画の保存、考古学調査、大仏片の保存、バーミヤーンの長期的保存管理計画などに関する成果発表と議論が交わされた。会議の最終日には、会議中の議論をふまえて、バーミヤーン遺跡保存事業に関する提言がとりまとめられた。</p> <p>また、この会議にあわせて、バーミヤーン遺跡保存事業の活動や成果を広く社会に公表する目的で、平成19年1月22日に公開シンポジウム「バーミヤーン遺跡保存の現在」を開催した。</p>
【実績値】	招へい者数：8名
【受託経費】	4,279千円 (39,544USD)

(様式3)

No. 2207-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 5 (2))	諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材育成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材育成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。		
【事業名称】	文化遺産保護国際貢献事業 専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する活動計画案協議のための専門家派遣 (I 5 (2) ア)		
【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水 真一
【スタッフ】	稲葉信子、二神葉子、田代亜紀子、豊島久乃、青木繁夫（以上、文化遺産国際協力センター）井上和人（以上、奈良文化財研究所）、上野邦一（奈良女子大学）、坪井善明（早稲田大学）		
【年度実績概要】	<p>ハノイの国会議事堂建設予定地から発見されたタンロン皇城遺跡では、平成 14 年 10 月から発掘調査が実施され、その都城遺跡としての価値が明らかにされると同時に、日本政府とベトナム政府の間でその保存に関する協力体制が築かれつつある。本事業では、ベトナム側と、平成 19 年 3 月に立ち上げられたタンロン皇城遺跡保存に係る日越合同専門員会の日本側専門家により作成された支援活動案に関する協議をおこなった。また、帰国後の 7 月 30 日には報告会を開催し、タンロン皇城遺跡保存に関わる専門家間での情報共有をおこなった。</p>		
【実績値】	報告書：文化遺産国際協力センター 『タンロン皇城遺跡保存に関する活動計画案協議のための専門家派遣 報告』07.07		
【受託経費】	720 千円		

(様式3)

No. 2207-2

業務実績書（受託事業）

<p>中期計画の項目 (I 5 (2))</p>	<p>諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材育成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材育成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。</p>		
<p>【事業名称】</p>	<p>文化遺産保護国際貢献事業 専門家派遣：ベトナム・タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業 (I 5 (2)ア)</p>		
<p>【担当部課】</p>	<p>文化遺産国際協力センター</p>	<p>【事業責任者】</p>	<p>センター長 清水 真一</p>
<p>【スタッフ】 清水真一、稲葉信子、二神葉子、田代亜紀子、豊島久乃、青木繁夫（以上、文化遺産国際協力センター）、井上和人、肥塚隆保、高妻洋成、小澤 毅（以上、奈良文化財研究所）、西村 康（ユネスコ・アジア文化センター遺産保護協力事務所）、上野邦一（奈良女子大学）、桃木至朗、蓮田隆志（以上、大阪大学）、西村昌也（関西大学）</p>			
<p>【年度実績概要】 タンロン皇城遺跡は、平成14年10月にハノイの国会建設予定地で発見された。タンロン皇城遺跡の保存に関しては、日本とベトナム政府の合意のもと日越専門委員会が平成19年3月に設立され協力体制が築かれている。本事業は、協力事業の一環として、平成18年度草の根文化無償資金協力により供与された保存修復用機材および測量機材の効果的な活用のための研修を実施するものである。 平成19年12月に、保存修復・考古・歴史の分野の専門家を派遣して現地調査を行うとともに、コア遺跡センター及び機材の供与先であるベトナム社会科学院考古研究所の関係者と、研修に関する事前協議を行い、機材設置場所の設定や必要な設備の準備について打ち合わせを行った。さらに、上記機関の若手職員を中心とした約20名に対し、木質文化財の保存に関する事例紹介を行った。平成20年2月には、上記機関及び関連機関の職員に対して、保存修復用機材のうち環境観測機材について、及び測量機材に関する研修を実施した。 環境観測用機材（温湿度、風向風速、日照を自動計測、データを蓄積する機材）に関しては、供与された機材を遺跡内に設置するとともに、環境計測の基礎および蓄積されたデータの取得や処理の方法、機器のメンテナンス方法等機器の扱い方について研修を行った。このことにより、現地の担当者による気象観測データ取得が可能となり、今後の遺跡保存に関わる調査研究への活用が期待できる。 測量については、タンロン遺跡調査に携わる20名余りに、供与されたトータルステーション等の機材を用いてトラヴァース測量の実習研修を行った。同時に、発掘調査により検出した遺構及び遺構群の解析作業を行う方法や手順等について、発掘調査支援研修を行った。</p>			
<p>【実績値】 ・報告書：文化遺産国際協力センター『タンロン皇城遺跡の保存に関する専門家派遣と研修事業』 08.03</p>			
<p>【受託経費】 4,391千円</p>			

(様式3)

No. 2207-3

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 5 (2))	諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材育成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材育成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
----------------------	---

【事業名称】	文化遺産国際協力コンソーシアム事業（I 5 (2) ア）
--------	------------------------------

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	豊島久乃、田代亜紀子、谷口仁（以上、文化遺産国際協力センター）
--------	---------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>本年度は、文化遺産国際協力に係わる諸課題について議論するための分科会を計 15 回、ワーキング・グループ会合を計 5 回開催すると共に、会員間の情報共有を促進するための場として研究会を 2 回、2 月には総会を開催した。また、コンソーシアム活動を広報するためにパンフレットの作成、シンポジウムの開催や公式ウェブサイトの拡充を行った。さらに、インドネシア、ベトナムへの調査団等派遣支援を行ったほか、協力相手国調査としてラオスおよびモンゴルでの現地調査を実施した。</p> <p>I. コンソーシアムの企画・運営</p> <ul style="list-style-type: none"> 運営委員会を 1 回開催して、活動方針等を協議したほか、総会を 2 月に開催した。 シンポジウム「文化遺産の国際協力と人材育成」を開催した。 企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会を計 15 回開催した。 町並みワーキング・グループおよび経済開発協力との連携に関するワーキング・グループの会合を計 5 回開催した。 広報活動のため、パンフレット作成や、一般向けウェブサイトの拡充を行った。 <p>II. 情報共有と情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> 会員専用コミュニティ・サイトを拡張し、日本の国際協力事業をとりまとめた「基礎情報データベース」（2007 年 12 月現在約 1200 件格納）を会員に向けて公開した。 研究会「自然災害による被災文化遺産に対する緊急支援」、「リビング・ヘリテージの国際協力」を開催した。 報告書『日本が実施している文化遺産国際協力事業一覧 ミJCIC-Heritage 基礎情報データベース 2007 年集計より-』を冊子にまとめ公開した。 報告書「リビング・ヘリテージの国際協力 - 町並み保存の現在と未来 -」を公開した。 協力相手国の国際協力の状況を知るため、ラオスおよびモンゴルにて協力相手国調査を実施した。 <p>III. 文化遺産国際協力に関することから</p> <ul style="list-style-type: none"> インドネシア政府からの要請に基づき、ジャワ島中部で 2006 年 5 月に発生した地震による被害を受けたプランバナン遺跡群に関する修理設計画策定支援のための調査団派遣支援（計 3 回）を行った。 ベトナム政府からの要請に基づき、ハノイ市タンロン遺跡保存調査団の派遣支援（計 3 回）を行った。
<p>【実績値】</p> <p>運営委員会の開催：1 回、総会の開催：1 回、シンポジウムの開催：1 回 分科会の開催：4 分科会(企画分科会、東南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会) 合計 15 回 ワーキング・グループの開催：合計 5 回 研究会の開催 2 回 協力相手国調査実施数：2 カ国（ラオス、モンゴル）</p> <p>『日本が実施している文化遺産国際協力事業一覧 -JCIC-Heritage 基礎情報データベース 2007 年集計より-』（2008 年 2 月）、 『リビング・ヘリテージの国際協力 - 町並み保存の現在と未来 - 』（2008 年 3 月）、 『文化遺産国際協力と人材育成 文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム報告書』（2008 年 3 月）、 『日本による文化遺産国際協力事業紹介』（2008 年 3 月）</p>
<p>【受託経費】</p> <p>48,000 千円</p>

(様式3)

No. 2207-4

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (2))	諸外国における文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材育成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材育成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
---------------------	---

【事業名称】	文化遺産国際協力拠点交流事業 インドネシア・ブランバナン遺跡群復興およびインド・アジャンター石窟壁画の保存修復に関する人材養成・技術移転 (I5 (2) ア)
--------	---

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水 真一
--------	--------------	---------	-------------

【スタッフ】

<インドネシア> 稲葉信子、二神葉子、岩出まゆ、豊島久乃、田代亜紀子（以上、文化遺産国際協力センター）、大和智（筑波大学）、花里利一（三重大学）、小野邦彦（サイバー大学）、箕輪親宏（独立行政法人 防災科学技術研究所）、近藤光雄、高品正行、野尻孝明、原光治（以上、財団法人 文化財建造物保存技術協会）

<インド> 山内和也、宇野朋子、谷口陽子、前田耕作、高林弘実（以上、文化遺産国際協力センター）、初井基充（実践女子大学）、大場詩野子（絵画保存修復専門家）、島津美子（オランダ文化遺産研究所）

【年度実績概要】

本事業は、各国の文化遺産保存の中核となる組織との交流を通して、文化遺産国際協力を効果的に行うために、現地で文化遺産の保護に携わる人材を養成することを目的としている。平成19年度事業は、被災した世界遺産ブランバナン遺跡をフィールドとしてインドネシア歴史考古総局と実施する事業と、アジアの文化遺産の中でも保存修復が技術的に困難である土壁に描かれた壁画について問題意識・技術・知識・経験の共有をはかるためインド考古局と実施する事業からなる。

インドネシア歴史考古総局との事業においては、2006(平成18)年7月、2007年(平成19)年2月に派遣された調査団の調査成果に基づき、ブランバナン遺跡の6祠堂を中心に、より詳細な破損状況把握、建築構造解析、地震動計設置による地震観測などが実施された。それらデータを基に耐震対策を考慮した修理設計が調査団によって作成され、インドネシア政府およびユネスコに対して提出されるとともに、国立インドネシア大学においてもその内容が講義された。

インド考古局との拠点交流事業では、2006(平成18)年9月25日から10月3日にかけて、アジャンター遺跡における保存修復の現状に関する予備調査と光学的手法による予備的調査等を実施した。アジャンター遺跡には、玄武岩からなる馬蹄形の渓谷に30におよぶ仏教石窟が開鑿され、壮麗な仏伝を中心とする仏教壁画と数多くの彫刻が残されている。本来の鮮やかな色調とは異なり、現在の壁画は黄変・暗色化が進んでおり、なんらかの対策が必要である。アジャンター遺跡の保存修復の現状に関して調査をするとともに、暗色化した壁画を赤外写真で撮影するなど予備的な調査を実施した。また、合意書締結のための準備としてインド考古局との意見交換を行った。

【実績値】 <成果物一覧>

- ・文化遺産国際協力センター 『ジャワ島中部地震被災文化遺産の保存修復に係る調査協力ー世界遺産ブランバナン遺跡復興支援報告ー』 08.3
- ・文化遺産国際協力センター 『世界遺産ブランバナン遺跡修復協力事業報告』 08.3
- ・Japan Centre for International Cooperation on Cultural Heritage, *Assessment Report on Damaged Prambanan World Heritage Compounds, Central Java*, 07.6
- ・Japan Centre for International Cooperation on Cultural Heritage, *Survey Report and Restoration Plan on Prambanan World Heritage Temples*, 08.3
- ・Japan Centre for International Cooperation on Cultural Heritage, 'Historical Documents of Prambanan Temples', *Survey Report and Restoration Plan on Prambanan World Heritage Temples*, 別冊1 08.3
- ・Japan Centre for International Cooperation on Cultural Heritage, 'Collected Drawings of Prambanan Temples', *Survey Report and Restoration Plan on Prambanan World Heritage Temples*, 別冊2 08.3
- ・Japan Centre for International Cooperation on Cultural Heritage, 'Geometrically Modified Images of Prambanan Temples', *Survey Report and Restoration Plan on Prambanan World Heritage Temples*, 別冊3 08.3
- ・文化遺産国際協力センター 『インド考古局とのアジャンター石窟壁画の保存修復に関する人材養成・技術移転業務報告書』 08.3

【受託経費】

25,000 千円

(様式1)

No. 2207-5

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I 5 (2))	諸外国に於ける文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
----------------------	---

【事業名称】	日中韓共同によるシルクロード沿線の文化財保護修復技術人員の育成プログラム (I 5 (2) ア)
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	保存計画研究室長 岡田健
--------	--------------	---------	--------------

【スタッフ】	清水真一（文化遺産国際協力センター）
--------	--------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>本事業は、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の依頼により、中国文化遺産研究院との共同で、2006-2010年の5年間で、シルクロード沿線の文化財保護修復技術のレベルを引き上げることを目的として、新疆、青海、寧夏、甘肅、陝西、河南の6省・自治区からの研修生を対象に、土遺跡、古建築、考古現場、陶磁金属、壁画、紙類、紡織品の保護修復および博物館技術の8項目の専門分野について、トレーニングを行うものである。</p> <p>1) 土遺跡保護専攻 期間：3カ月（4月16日～7月13日）、研修生の人数：13名 土遺跡保護専攻は2006年度から連続3年で同じメンバーが参加して実施される。第2年目の今年度は、陝西省韓城市梁帯村で2004年秋に大量に発見され2006年には早くも中国の全国重点文物保护单位に指定された西周末・東周早期墓群のうち、現在発掘作業が行われている大型墓を現場実習に使用して実施した。日本からは7名の講師が現地へ赴き、中国側講師と共同で指導を行った。</p> <p>2) 考古発掘現場保護専攻 期間：3カ月（4月16日～7月13日）、研修生の人数：14名 考古発掘現場保護専攻は単年度の実施である。前期の理論講座に引き続き、土遺跡保護専攻と同じ梁帯村の西周末・東周早期墓群の発掘現場から続々と出土する金属器、石製品、木質遺物の痕跡、馬骨などを対象に現場実習を行い、単なる研修にとどまらない実質的な作業成果を残した。日本からは(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所の専門家をはじめとする9名の講師が現地へ赴き、陝西省考古研究所をはじめとする中国側専門家と共同で指導を行った。</p> <p>3) 紙の文化財保護専攻 期間：3カ月（10月8日～12月27日）、研修生の人数：12名 紙の文化財保護専攻は単年度の実施である。中国文化遺産研究院の人材育成センターで実施した。日本からは(財)国宝修理装こう師連盟の技術者をはじめとする12名の講師がとして北京へ赴き、伝統的な保存修理技術のほか、現代科学によって解明された紙の文化財の材料や技法、欧米的な新しい保存方法などについて、中国国家図書館や故宮博物院をはじめとする中国側専門家と共同で指導を行った。</p>
【実績値】
【受託経費】
11,729 千円

(様式3)

No. 2207-6

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I5 (2))	諸外国に於ける文化財の保存・修復に関する技術移転を積極的に進める。また、アジア諸国の文化財保護担当者や保存・修復専門家などの人材養成に関する支援事業を国内外で実施するとともに、人材養成に必要な教材や教育手法に関する研究開発を行う。
---------------------	---

【事業名称】	ユネスコ/日本信託基金 イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト (I5 (2) ア)
--------	--

【担当部課】	文化遺産国際協力センター	【事業責任者】	センター長 清水真一
--------	--------------	---------	------------

【スタッフ】	山内和也、宇野朋子、有村誠、谷口陽子（以上、文化遺産国際協力センター）、青木繁夫、西山伸一（以上、客員研究員）、肥塚隆保、高妻洋成、降幡順子、脇谷草一郎（以上、奈良文化財研究所）、西尾太加二、大森信宏（以上、静岡県埋蔵文化財調査研究所）
--------	--

【年度実績概要】	<p>本事業は、イラクの保存修復専門家を日本へ招へいし、文化財の保存修復に関する講義や実習を通じて、専門家の人材育成を行うことでイラクの文化財の保存に寄与することを目的としている。文化遺産国際協力センターは平成17年度よりユネスコ文化遺産保存信託基金及び運営費交付金による西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業の一環として、イラクの保存修復専門家を招へいし、さまざまな文化財の保存修復研修を実施してきた。</p> <p>本年度は、イラク国立博物館よりファーエザ・M・ジュマー (Faeza M. Jumaah) 氏、タグリード・H・フゼール (Taghreed H. Khudhair) 氏、ニネヴェ古物遺産局からスィナーン・A・ユーニス (Sinan A. Yunis) 氏を招へいし、9月19日から12月13日の85日間にわたり、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所において研修を実施した。</p> <p>今回の研修では、イラク国立博物館およびユネスコからの要望のもとに、木製品の保存修復についての実習を中心に、保存修復のための基礎講義やさまざまな保存修復に用いられる機器の使用についての実習を行った。研修の中では、東京、奈良の博物館、史跡、発掘現場などを見学し、日本での保存修復活動の現状の視察も行った。</p> <p>また、「イラク・アフガニスタンの文化財保存の現状」と題して、イラク国立博物館や地方の博物館の状況、博物館保存研究室での活動と、今回の研修成果についての報告会を実施した。</p>
【実績値】	招へい者数：3名
【受託経費】	7,869 千円 (70,000USD)

（様式 1）

No. 2602-1

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I 7（1））	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
---------------------	--

【事業名称】	関西大学博物館所蔵重要文化財縄文籠形土器の復元修理（I 7（1））
--------	-----------------------------------

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	保存修復科学センター 副センター長 川野邊 渉
--------	------------	---------	-------------------------

【スタッフ】	北野 信彦（保存修復科学センター）、 犬竹 和（修復家）
--------	---------------------------------

<p>【年度実績概要】</p> <p>目的</p> <p>この籠形土器は、大正8年に大阪府藤井寺市国府遺跡から出土したものである。籠の中に粘土を押し付けて製作した貴重な土器で重要文化財に指定されている。側面の籠の圧痕から当時の編み物の高度な技術を垣間見ることができる。しかしながら出土したのは全体の3分の1程の破片のみで、残りは石膏で復元されていた。近年にいたって、使用された修復材料の経年変化による劣化が認められ、再修復を要する状態にあった。そこで、前年度の関西大学博物館所蔵縄文鉢形土器に引き続き、今回は本資料の再修復を行うこととなった。今回の再修復でも土器が展示や学術研究に活用されることを目的とし、石膏に代わる土器修復材料であり、質感・耐久性などにすぐれた補修用擬土を使用して修復した。</p> <p>概 要</p> <p>◇修復対象 籠形土器</p> <p>◇修復概要</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 解体およびクリーニング・・・劣化した石膏は超音波メスで除去。接着剤は有機溶剤を使用して除去し解体した。 2) 土器の強化・・・劣化して脆弱になった土器破断面をアクリル樹脂で強化した。 3) 接合・・・アクリル樹脂を使用して破片を接合した。 4) 復元・・・補修用擬土を充填し、常温で乾燥後、整形し文様を施した。55℃の定温乾燥機に入れ樹脂を硬化させた。
<p>【実績値】</p> <p>受託事業報告書 1件 本事業は関西大学から受託された。</p>
<p>【受託経費】</p> <p>1,365 千円</p>

(様式1)

No. 2602-2

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I7 (1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
---------------------	--

【事業名称】	国指定重要文化財「八窓庵」中柱の修復に関する調査研究 (I7 (1))
--------	-------------------------------------

【担当部課】	保存修復科学センター	【事業責任者】	副センター長 川野邊渉
--------	------------	---------	-------------

【スタッフ】	森井順之（保存修復科学センター） 楠京子（文化財保存）、山路康弘（別府大学）
--------	---

<p>【年度実績概要】</p> <p>文化財建造物の多くを占める木造建造物の修復においては、強度的に再用不可能な部材は同質同形の部材によって置き換えることが通常の修復工事では行われている。本研究で対象とした八窓庵中柱に関しては、その性格上本茶室の性格に大きな意味を持ち、かつ虫損などによって弱っていたところを事故により破損したために通常の修復方法では再用できずまた同質同形材の入手も困難であった。そのため、残存部材の強化と接合、修復補彩を行うことで採用できる材料技法の開発を目的とした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 残存部材のクリーニングを行った 2. 同質の材料によって、減圧含浸の材料と条件を決定した 3. 上記の結果に基づき各部材の減圧含浸を行った。 4. 表面に残存した合成樹脂を除去、乾燥後接合した 5. 不足部分を木材と人工木材を用いて成型した 6. 新補部分を周囲にあわせて補彩を行った
<p>【実績値】</p> <p>受託事業報告書 1件 当研究は札幌市から依頼された。</p>
<p>【受託経費】</p> <p>2,226 千円</p>

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 (I7(1))	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
--------------------	--

【事業名称】	「発掘調査のてびき」作成に係わる業務一式 (I7(1))
--------	------------------------------

【担当部課】	埋蔵文化財センター	【事業責任者】	センター長 安田龍太郎
--------	-----------	---------	-------------

【スタッフ】	山中敏史、小林謙一、小澤毅、金田明大、岡村道雄、深澤芳樹、松村恵司ほか
--------	-------------------------------------

【年度実績概要】	<p>本年度は、7月・10月・1月にそれぞれ2日間をあてて、奈良で3回の作成作業部会を開催した。前年度に引き続き、文化庁委員、地方公共団体委員、奈文研委員が一堂に会して『集落遺跡・調査編』の執筆内容および『整理・報告書編』の項目の検討を実施した。また、これらの作成作業部会の検討成果と事務局によるそのとりまとめを受けて、3月に東京で作成委員会を開催し、本年度の事業報告をおこなうとともに、それに対する指導と助言を受けた。</p> <p>『集落遺跡・調査編』は、原稿の集約と編集・レイアウトを終了した。一方、『整理・報告書編』は構成の細部について検討をすすめるとともに、内容に関して項目ごとに討議を重ね、方向性をほぼ固めるにいたった。</p>
----------	--

【実績値】	<p>作成部会開催件数： 3回 作成委員会開催件数： 1回 実績報告書： 1冊（奈良文化財研究所『受託業務「発掘調査のてびき」作成に係る業務 実績報告書』2008.3）</p>
-------	--

【受託経費】	6,299 千円
--------	----------

業務実績書（受託事業）

中期計画の項目 （I7（1））	地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が有する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本法人が行った調査・研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言の円滑かつ積極的な実施を行う。
--------------------	--

【事業名称】	徳島市観音寺遺跡・敷地遺跡（阿波国府推定地）出土木簡の総合的研究（I7（1））
--------	---

【担当部課】	都城発掘調査部 史料研究室	【事業責任者】	副部長 山崎信二
--------	---------------	---------	----------

【スタッフ】	渡辺晃宏、馬場基、市大樹、山本崇、浅野啓介、中村一郎、高妻洋成、大橋育順（(財)徳島県埋蔵文化財センター）、和田萃（京都教育大学名誉教授）
--------	---

【年度実績概要】	<p>平成17・18年度の2カ年にわたって、観音寺遺跡出土木簡の総合的研究を実施したが、その後も木簡の出土があいついだため、従前の研究成果を受けて引き続きさらに2カ年の計画で表記の受託研究を実施することになった。今回は、観音寺遺跡だけでなく、関連する敷地遺跡の木簡も対象とし、2カ年で計120点の木簡について、最新の機器を用いた再解読を行ってその歴史的な評価を確定し、また貴重な史料群を後世に残すため、木簡ごとに最適な手法を選択した上で、科学的な保存処理を行うものである。初年度にあたる今年度対象としたのは60点である。本年度実施した事業は下記の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 現在の水漬け状態における積文の再検討を、最新鋭の赤外線テレビカメラ装置を用いて実施し、現状の積文案を作成した。積読検討会は、これまで観音寺遺跡・敷地遺跡出土木簡の積読に携わってこられた京都教育大学名誉教授の和田萃氏にもご参加いただき、従来の積読を踏まえて実施した。 ② 同上について、4×5モノクロ写真（ネガ）、4×5カラー写真（ポジ）、デジタルカメラによる赤外線撮影写真の3種類の撮影を行った。原版は、奈文研と(財)徳島県埋蔵文化財センターの双方に保管している。 ③ ①②による水漬け状態における作業終了後、埋蔵文化財センター保存修復工学研究室において科学的な保存処理を実施した。保存処理方法は、木簡の現在の状況に応じて、真空凍結乾燥法と高級アルコール法の適切な方を選択して実施した。 ④ 保存処理後、①と同じ要領で、再度積読検討会を実施し、60点の木簡について積文を確定した。 ⑤ 保存処理後の状態について、②と同じ要領で写真撮影を実施した。 <p>以上の調査の結果、従来の積読に加えて、今年度対象とした木簡についてもさらに読みを深めることができた。また、保存処理によってさらに墨痕が鮮明になる場合があり、最新の機器を使用したことや、これまで奈文研に於ける永年にわたる木簡解読技術の蓄積ともあいまって、従来明らかでなかった文字を解読することができ、従来の積文を訂正すべき部分があることが明らかになった。</p> <p>具体的な調査成果については、委託主体である(財)徳島県埋蔵文化財センターに業務完了報告書の形で報告し、今年度は特に公表には至っていない。平成17・18年度の2年間にわたって受託事業として調査を実施した85点の木簡、平成20年度に受託研究を実施する予定の60点の木簡とともに、最終的に4カ年にわたる調査成果を集成する形で、平成20年度末に(財)徳島県埋蔵文化財センターから報告書を公刊する予定である。</p>
----------	--

【実績値】	<p>解読木簡点数60点、水漬け状態の写真撮影モノクロ60点・カラー60点・赤外線デジタル60点、保存処理後の写真撮影モノクロ60点・カラー60点・赤外線デジタル60点 木簡の科学的保存処理60点</p>
-------	--

【受託経費】	1,200千円
--------	---------